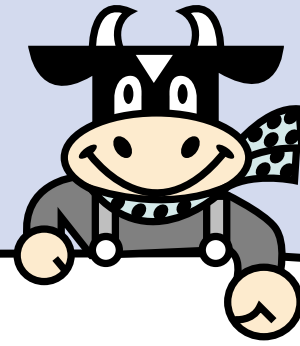




ワンポイント・アドバイス



乳成分が物語るもの

乳牛の病気の多くは、給与している飼料に左右されます。濃厚飼料過給によるルーメンアシドーシスや肥満、二次発酵サイレージによるケトosis、カリウム濃度の高い飼料による乳熱、硝酸態による乳房炎・流産・突然死など。

これら給与飼料が誘因となる病気の発生予想は、乳検データや乳成分の変化を確認することによって可能となる場合があります。ここではほんの一部分ですがその概要をお話してみましよう。

《乳 飼 比》

乳飼比とは読んで字の如く乳代に占める購入飼料代の割合です。購入飼料の殆

どは配合飼料ですので、配合飼料の給与量が少なくても7000kg程度は乳を生産しています。

但したくさん与えたからといって生産量が増加するかという点でもありません。(図1) そればかりか除籍率や死産被害率が上昇します。(図2、図3)

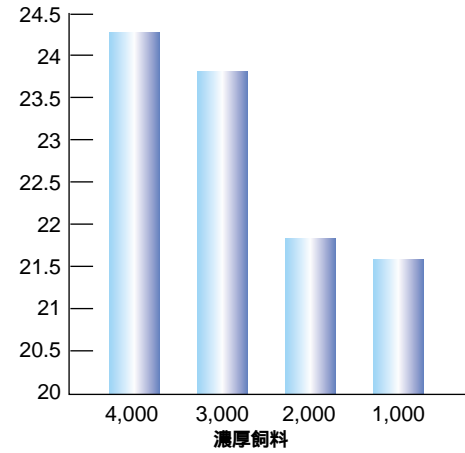


図1. 乳飼比と産乳量

《乳 成 分》

総論的には乳脂肪率(F)は給与している粗飼料の量と質を反映し、無脂乳固形分率(SNF)や乳蛋白率(P)はエネルギー量を反映しています。(但し、遺伝要因もあるので完全ではありません。(言い換えれば、Fの割合SNFが低い牛群は粗飼料多給型に多く見られ、SNFの割合Fの低い牛群は濃厚飼料多給型に多く見られます。

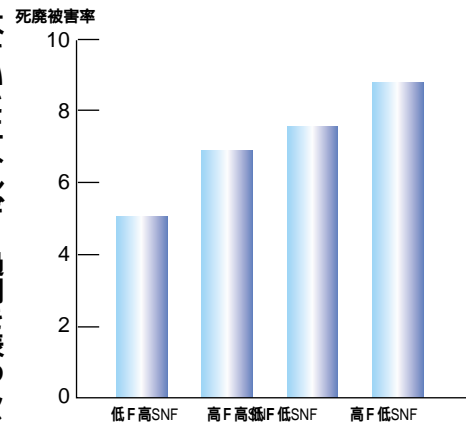


図4. 乳成分と死産被害率 (F平均4%、SNF平均8.7%)

F、SNFそれぞれの平均値が高い牛群と低い牛群に分けてみると、低F高SNF牛群で死産被害率が極端に高くなっているのが理解できると思います。(図4)

大きいとエネルギー過剰を表わし、繁殖成績と深い関わりを持っています。さらに病気の多い牛群では一定せず広い範囲に分散する傾向があります。平均数値(76.56%)を高く逸脱した牛群の死産被害率は飛び抜けています。(図5)

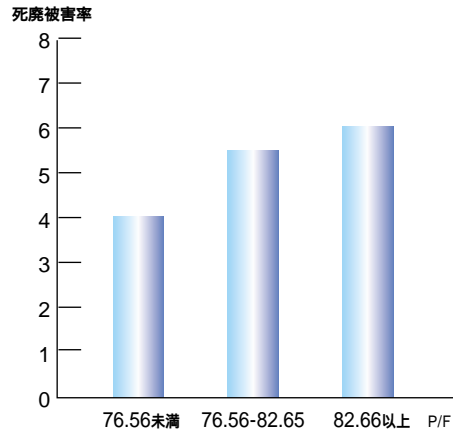


図5. P/Fと死産被害率

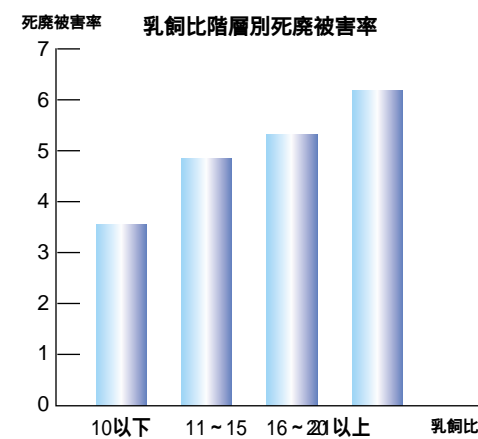


図3. 乳飼比階層別死産被害率

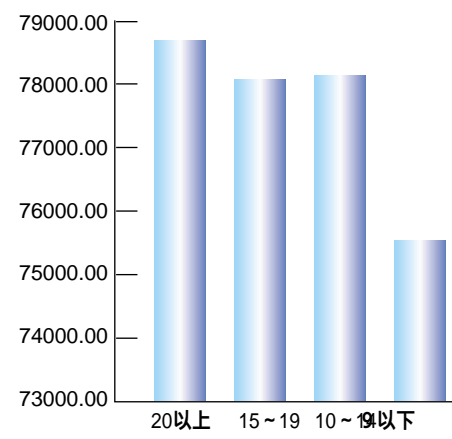


図2. 濃厚飼料と除籍率

《ま と め》

紙面の関係でほんの一部分の紹介になってしまいましたが、今まで多方面から調査した結果では低エネルギー牛群のほうが重傷の内科疾患が少ないようです。(繁殖障害は多くなります)また、群で同じ飼養管理をしているので一頭診療すると何頭か続けて発病するということも多々あります。

「どの程度の飼料給与でどの程度牛乳を出荷するか」は、各戸の経営方針で異なると思いますが、牛の出しているサインを早く見つけることが病気を減らす第一歩だと思います。